

モンゴルから見た日本

安 倍晋三首相が3月30、31日にモンゴルを訪問しました。政治、安全保障、資源を含む経済や人的交流について、幅広く意見交換したとのこと。鉱山開発ブームで、世界有数の高度成長国となったモンゴルは、今、世界中から注目されています。日本企業がモンゴル進出を考える際、この国の内外のビジネス環境、発展段階、歴史や文化、国民性、そして日本企業に対する期待について、事前によく知っておくことが大切です。

モンゴルと諸外国の関係を見てみると、これまで国の経済を支えてきたエルデネト銅鉱山や唯一の鉄道会社はロシアとの合弁会社で、石油もほぼ100%ロシアからの輸入です。物流面では中国への依存度が高く、ほとんどの消費物資は中国から入ってきますし、輸出も7~8割が中国向けといわれます。しかし、モンゴルとしては、対口、対中依存度が高くなり過ぎることは危険と考え、日本や米国などを『第三の隣国』と位置付け、バランスを取ろうとしています。こうした背景から、モンゴルでは、鉱山開発やインフラ整備、産業育成、都市開発といった国家開発に対する、第三国の参加が歓迎されるのです。

モンゴルと日本には、人口や国土の広さ、保有する資源、発展段階などの面で相違点があります。こうした中、お互いに相手を持っていないものを与え合い、相互互惠関係を作ることが大切だと思います。モンゴル企業は日本企業の資金や技術力、ビジネスのマナーやノウハウを必要としているのです。

関係構築に向けて一番大事なことはパートナー選びです。よく、歯車が合わないというか、お互いのビジネス規模や未来に向けた希望がかみ合わないことがあります。また、お互いの国民性を知らないために誤解やすれ違いが起きやすいようにも思います。

モンゴル人と日本人との違いを二つ挙げてみます。まず、日本人は和や協調性を重視します

が、モンゴル人は「個の力」を重視する個人主義者です。これは農耕民族と遊牧民族の文化の違いが最も強く表れる点だと思います。モンゴルの遊牧民は周囲数十キロにわたり家族以外は誰もいない草原で家畜と生活します。オオカミに襲われたり寒波や吹雪に遭ったり、何かあったときも他人に相談などしてはられません。自分たちで生き延びる必要があるため、臨機応変に対応する力は抜群です。その意味では、家族の絆が大変強く、団結して助け合うので、企業でも、「職場皆が家族」という和気あいあいとした雰囲気大事になります。

もう一つは、日本人は石橋をたたいても渡らないほどの計画好きですが、多くのモンゴル人はだいたいの方向性だけ決め、最初の一步を踏み出すことに重点を置き、走りながら軌道修正します。急速な変化の中にあるモンゴルでは、計画が出来上がるのを待っているのはチャンスを逃してしまうからです。

このほか、いろいろな違いがありますが、違いがあるのは当たり前です。お互いに尊敬し合い、相互理解を深めれば問題ありません。何よりもモンゴル人の日本人に対する信頼は抜群に高いのです。日本人は嘘をつかず、裏切らず、信頼できるとしています。モンゴル人は、日本の技術だけではなく、日本人の道徳観やマナーも学びたいと思っています。モンゴル人は基本的にはお客さんを大事にしますし、日本語を話す人や親日派が多いので、兄貴になったつもりで親しく接すれば、必ず良いパートナーに巡り会えるでしょう。

われわれモンゴル国CEOクラブは、モンゴル最大手企業30社の社長が発足した組織で、経済同友会のように民間セクターを引っ張って官民共同の力でモンゴルの経済発展を遂げることを目標とした同志の会です。経済同友会が私たちを目標とした同志の会です。経済同友会が私たちの兄貴分になって日本の経験などをさまざまなことを教えてくれることを強く願っています。



L.ダワージャルガル氏
モンゴル国
CEOクラブ理事